

高校生の学校内／学校外の経験が「意欲」に与える影響

小川 和孝（東京大学教育学部）

■要約

- ◎近年、「意欲」という概念が教育だけではなく、広く社会で求められている。この概念は、しばしば社会階層などの属性要因によって影響を受けていると言われているが、個人の経験の中で効果のあるものはないだろうか。
- ◎学校内の経験に注目すると、高校グループにかかわらず、授業への満足や、行事への適応が「未知のことに取り組む意欲」を高める効果が見られる。また、学校外の経験では趣味や友人関係の充実が意欲を高める効果があることがわかった。

1 問題設定

現代社会を特徴づける能力の1つとして「意欲」という概念が注目されており、近年は教育の世界でも多く言及されてきている。1992年から実施された学習指導要領では、「自ら学ぶ意欲の育成や思考力・判断力・表現力などの能力の育成を重視する」という立場が打ち出された。また、それに先立つ教育課程審議会の議事録では「これからの学校教育は、生涯学習の基礎を培うものとして、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成を重視する必要がある」と言われている。

このような発言の背後には、従来のような知識の理解を重視する立場からの転換を図ろうという考えが見られる。耐久消費財の生産・消費が経済発展の主要な要因となっていた時代には、人々の能力もそれに応じたものが要請された。すなわち標準化された知識を理解し、効率的に使いこなすというようなものである。しかし、サービス・情報などの付加価値的なものが経済発展において重要にな

ってくると、その状況は変わってくる。目まぐるしく変化する知識や情報に対して、それらを見極め、常に反省的に検討するような「意欲」が要請されてくるのである。

しかし、ここで言うような「意欲」とはどのようにして形成されるものなのだろうか。しばしば、その形成には社会階層が重要な要因となっていると言われることがある。

私の関心は、出自という要因や、あるいは個人では左右できないマクロな社会経済的な要因によるのではなく、個人の何らかの行為によってそのような意欲を形成することは可能なかどうかというところにある。それを分析するために本稿では、高校生の学校内外の経験や意識に着目する。たとえば、学校内の授業や行事への参加経験によって、意欲に差は生じるのか。また学校内の経験に注目するとき、過去の研究では、「進学率の高い学校の生徒ほど、学校生活に肯定的・前向きな意識や態度」を持つことが指摘されている（荒牧2001: 68）。もし学校内の経験が意欲形成に積極的な機能を持つのであれば、そのよう

な学校への適応を示さない層では、学校外での経験が代替的に働くのではないだろうか。このような関心に基づいて分析を行いたい。

2 先行研究の検討

教育社会学者の荻谷剛彦は、高校生和学校外での学習時間の調査の二時点間比較をもとに、次のような知見を得ている（荻谷 2001）。第一に、1979年に比べて1997年では、高校生の学習時間が全体的に減少していることである。そして第二に、減少の幅は家庭の出身階層によって異なり、低階層においてより大きな減少が見られるということである。すなわち、階層間の学習時間の差が拡大しているということであり、このことから荻谷は努力の量が過去に比べて変化していると見なし、「意欲格差（インセンティブ・ディバイド）」と名づけている。

一方、教育社会学者の本田由紀は「意欲」に対して、別の見方を提示している（本田 2005）。前述の荻谷は、学校外での勉強時間を用いて「意欲」に変化が生じたと論じていた。しかし本田は、子どもたちがかつてと比べて「がんばらなくなった」わけではないという。「がんばる」対象が変化し多様化しているため、勉強時間だけで見ると努力の量が減少したように見えるというのだ。本田はそのことを、努力に対する自己認識の質問を通して確認している。さらに本田は、現代の子どもたちはコミュニケーション能力や対人関係能力というような、新しいタイプの能力に努力を傾けており、学習時間で測られるような旧来の努力に価値を見出していないというのである。

本田によれば、このような変化は近代が変質した「ポスト近代社会」の要請ということだ。ポスト近代社会とは近代化が徹底され、情報化・消費化・サービス化などが進んだ社会のことを指す。そこでは、労働の生産性を上げるために、「意欲・個性・ネットワーク形成力」などの「ポスト近代型能力」と呼ば

れるものが重要になってくる。そして、このようなポスト近代型能力は測定の基準が曖昧である上に、社会階層による影響が大きいことを本田は指摘している。家庭での親子のコミュニケーションが密であるほど、ポスト近代型能力が高い傾向があるというのだ。

上に引用した荻谷・本田はともに、社会階層が意欲の形成において重要となっているという点で共通した主張をしている。つまり、本人の意思ではどうにもならない出自が強い影響力を持ってしまっているということである。

しかし、低階層の出身であっても高い意欲を持つ人々も当然存在する。前述の本田は、専門高校の生徒においてポスト近代型能力が高いことに注目し、専門性を身につけることが一種の「鎧」となることを指摘している。だが、そのように制度に大きく基づく議論は、人的・金銭的なコストの問題もあり、必ずしもすぐに実現可能なものではない。そうではなく、学校内外でのもっと個人的な経験で有効なものはないだろうか。

たとえばその1つとして、文化祭・体育祭などの学校行事が挙げられる。学校行事は制度上、特別活動という枠組みに含まれるが、文部科学省（2003）の『高等学校学習指導要領』によれば、その目標は「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことである。ここで語られている「自主的、実践的な態度」とは本研究で捉えようとしている意欲ともかかわりがあると考えられる。

一方で、学校内の活動が意欲を高めるという見方は一元的かもしれない。ドイツの社会学者U.ベックは、近代の特徴を「個人化」という概念で捉えている（Beck 1986=1998）。ここでいう「個人化」とは共同体などのあらゆる束縛から人々が解放され、自らの人生を自分で選択しなければならない変化を指す。

そのような変化の中では、学校という共同体の中の経験よりも、趣味や友人関係などの私的な経験が個人にとって重要なものとなっている可能性が考えられる。実際、1990年代の変化として高校生は「学校を含め多様な生活領域をその時々で切り替えて、うまく楽しむようになっている」ということが指摘されている（轟 2001: 153）。このような点を踏まえ、以降では「文化祭・体育祭などの学校行事」と「趣味・友人関係」と意欲のかかわりを考えたい。

3 仮説の提示

本研究において、提示される理論仮説は以下の通りである。

●理論仮説 1

高校生が持つ意欲は、Aグループの生徒ほど高い。

●理論仮説 2

学校内の経験の充実が意欲を高めるが、それはAグループの生徒ほど高い。

●理論仮説 3

学校外の経験の充実が意欲を高め、学校内経験を代替するものとなる。

今回の調査で得られたデータにおいては、両親の学歴がわかっているものが多くないため、理論仮説 1 においては高校グループから意欲への関係を扱う。親の学歴によってどのような学校へ入学できるかが大きく左右されているのは、荻谷（1995）などの研究によってよく知られており、高校グループは社会階層を代替する指標として採用する¹。

分析に用いる質問は以下の通りである。まず意欲の指標として、Q34G「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」である。これにより、本研究で扱う意欲とは、「未知のものに取り組む姿勢」として定義する。

それから学校内の経験を聞く質問として、Q11A「学校の授業に満足している」、Q7A「文化祭や学芸発表会に積極的に参加している」、Q7B「体育祭（運動会）に積極的に参加している」。そして、学校外の経験としてQ36A「趣味が充実している」、Q36C「友人関係が充実している」である。

またQ7AとQ7Bの2つに関しては、ともに学校行事のことを聞いている質問として、それぞれを得点化し、合計した尺度として用いる²。具体的には、「1. とても積極的」から「5. 行われていない」までをそれぞれ1～5点として2つの質問について合計し、1～4点を「学校行事へ適応している」、5～10点を「学校行事へ適応していない」とした。

また、これらの質問によって、作業仮説は以下の通りとなる。

●作業仮説 1

Aグループほど、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」人が多い。

●作業仮説 2-1

授業満足度や行事適応度が高いと、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」人が多い。

●作業仮説 2-2

授業満足度や行事適応度を第三変数としたとき、Aグループほど「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」という人が多く、第三変数の影響はない。

●作業仮説 3-1

趣味や友人関係が充実しているほど「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」人が多い。

1 実際、親の学歴と高校グループを指標にしたクロス表では以下のような結果が得られている。すなわち、Aグループの生徒ほど、大卒の親を持つ者が多い（章末p.187 表4-14、15参照）。

2 Cronbachのアルファ=0.801。

●作業仮説 3-2

授業満足度や行事適応度が低くても、趣味や友人関係の充実度が高いと、「うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む」と答える人が多い。

次の節ではこれらの仮説に対する検証を行う。

4 仮説の検証

4.1 高校グループと意欲の関係について

まず、作業仮説 1 の検証を行う。表 4-1 は、「未知のことへの意欲」と「高校グループ」の二重クロス表である。

表 4-1 において、カイ 2 乗検定の結果は危険率 1% で有意である。よって、作業仮説 1 は実証された。すなわち、「A グループの生徒ほど、『うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む』人が多い」ことがわかる。

4.2 学校内の経験が意欲に与える影響について

次に作業仮説 2 の検証に入る。学校内の経験はどのように意欲への影響を与えているのだろうか。まず表 4-2、3 の 2 つの二重クロス表を提示する。

これら表 4-2、3 は、いずれもカイ 2 乗検定において危険率 0.1% で有意であった。すなわち、「授業満足度や行事適応度が高いと、『うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む』人が多い」という作業仮説 2-

1 は実証されたとと言える。

しかし、このように単純な因果関係を想定してよいだろうか。たとえば、高校グループに媒介されていることが考えられる。前述のように進学率が高い学校ほど、学校での授業や行事への取り組みに熱心であるという傾向があるからだ。実際、次の表 4-4、5 のような二重クロス表の結果が得られている。

表 4-4、5 から明らかのように A グループでは、授業満足度と行事適応度が B・C グループと比べて有意に高い。

よって、次に高校グループを第三変数として導入した場合の三重クロス表を分析する。

表 4-6、7 は、いずれもカイ 2 乗検定において有意な結果が得られた。このことから、高校グループは意欲への直接的な因果関係を持たず、授業への満足や行事への適応によって意欲が高まっているということが読み取れる。すなわち、作業仮説 2-2 では高校グループこそが意欲を規定しており、学校内の経験は擬似相関を作り出していると想定したが、むしろ結果は逆であった。授業や行事などの学校内の経験こそが意欲形成の重要な要因だったのである。

なぜ、仮説とは異なる結果が出たのだろうか。それは当初、高校グループないしは社会階層の持つ影響力を、学校内の経験に対して過大に考えていたからであるという推測ができる。いわば、属性要因がより強い力を持つと想定していたのであるが、実際には学校内の経験のほうが影響力を持っていたということだ。

表 4-1 「未知のことへの意欲」×「高校グループ」

		Q34G × 高校グループ			
		未知のことへの意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
高校グループ	A グループ (%)	49.0	51.0	100.0	590
	B グループ (%)	43.7	56.3	100.0	300
	C グループ (%)	40.0	60.0	100.0	612
	合計 (%)	44.3	55.7	100.0	1,502

危険率 1% で有意 p=0.007

表4-2 「未知のことへの意欲」×「授業満足」

Q34G×Q11A

		未知のことへの意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
授業満足	そう思う (%)	51.4	48.6	100.0	710
	そう思わない (%)	37.8	62.2	100.0	789
	合計 (%)	44.2	55.8	100.0	1,499

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-3 「未知のことへの意欲」×「行事適応」

Q34G×Q7A・B

		未知のことへの意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
行事適応	あてはまる (%)	54.3	45.7	100.0	832
	あてはまらない (%)	31.6	68.4	100.0	655
	合計 (%)	44.3	55.7	100.0	1,487

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-4 「授業満足」×「高校グループ」

Q11A×高校グループ

		授業満足		合計	N
		そう思う	そう思わない		
高校グループ	Aグループ (%)	66.3	33.7	100.0	605
	Bグループ (%)	33.0	67.0	100.0	306
	Cグループ (%)	35.5	64.5	100.0	633
	合計 (%)	47.1	52.9	100.0	1,544

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-5 「行事適応」×「高校グループ」

Q7A・B×高校グループ

		行事適応		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
高校グループ	Aグループ (%)	66.3	33.7	100.0	600
	Bグループ (%)	48.2	51.8	100.0	305
	Cグループ (%)	49.4	50.6	100.0	625
	合計 (%)	55.8	44.2	100.0	1,530

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-6 「未知のことへの意欲」×「授業満足」×「高校グループ」

Q34G×Q11A×高校グループ

高校グループ			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
Aグループ	授業満足	そう思う (%)	51.9	48.1	100.0	391
		そう思わない (%)	42.9	57.1	100.0	198
		合計 (%)	48.9	51.1	100.0	589
危険率5%で有意 p=0.039						
Bグループ	授業満足	そう思う (%)	55.0	45.0	100.0	100
		そう思わない (%)	37.9	62.1	100.0	198
		合計 (%)	43.6	56.4	100.0	298
危険率1%で有意 p=0.005						
Cグループ	授業満足	そう思う (%)	48.9	51.1	100.0	219
		そう思わない (%)	35.1	64.9	100.0	393
		合計 (%)	40.0	60.0	100.0	612
危険率1%で有意 p=0.001						

表4-7 「未知のことへの意欲」×「行事適応」×「高校グループ」

Q34G×Q7A・B×高校グループ

高校グループ			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
Aグループ	行事適応	あてはまる (%)	56.1	43.9	100.0	387
		あてはまらない (%)	34.7	65.3	100.0	199
		合計 (%)	48.8	51.2	100.0	586
危険率0.1%で有意 p=0.000						
Bグループ	行事適応	あてはまる (%)	55.5	44.5	100.0	146
		あてはまらない (%)	31.6	68.4	100.0	152
		合計 (%)	43.3	56.7	100.0	298
危険率0.1%で有意 p=0.000						
Cグループ	行事適応	あてはまる (%)	51.5	48.5	100.0	299
		あてはまらない (%)	29.6	70.4	100.0	304
		合計 (%)	40.5	59.5	100.0	603
危険率0.1%で有意 p=0.000						

4.3 学校外の経験と意欲の関係

しかし、学校内の経験が高い意欲につながっているといっても、すべての人が学校内での経験が充実しているわけではないし、高校グループが学校内の経験への影響力を持っていたということを忘れてはならない。特に近年は、先に挙げたように努力が変質してきたことや、インターネットの発達、学校外の生活世界の拡大により、学校内での経験がかつてと比べて希薄化している可能性がある。

そのような中では、学校外の経験が意欲に結びついているということはないだろうか。このような考えに基づき、趣味と友人関係の充実度に注目した。

表4-8、9はいずれもカイ2乗検定において、危険率0.1%で有意であった。すなわち、作業仮説3-1の「趣味や友人関係が充実しているほど『うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む』人が多い」は支持

される。

作業仮説3-2の検証に移る前に、4.2と同様、高校グループの影響を調べておく。高校グループを第三変数にとり、表4-8、9の変数との関係を調べたのが、表4-10、11である。

表4-10においては、それぞれ危険率0.1%で有意であり、高校グループの影響はないということがわかる。また表4-11においては、Aグループでは危険率0.1%、Cグループでは危険率1%で有意であった。友人関係の充実度においては高校グループの影響を完全に排除することはできないが、Bグループでは単にサンプルが少なかったという可能性も考えられる。よって、以降では留意はしつつも分析に大きな支障はないと判断し、高校グループの影響は少ないという前提に立つ。

次に作業仮説3-2の検証に移る。授業満足度を第三変数としたときの三重クロス表に

表4-8 「未知のことへの意欲」×「趣味充実」

		未知のことへの意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
趣味充実	あてはまる (%)	51.7	48.3	100.0	1,024
	あてはまらない (%)	28.1	71.9	100.0	469
	合計 (%)	44.3	55.7	100.0	1,493

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-9 「未知のことへの意欲」×「友人関係充実」

		未知のことへの意欲		合計	N
		あてはまる	あてはまらない		
友人関係充実	あてはまる (%)	48.1	51.9	100.0	1,173
	あてはまらない (%)	30.2	69.8	100.0	315
	合計 (%)	44.3	55.7	100.0	1,488

危険率0.1%で有意 p=0.000

よって、学校内の経験と学校外の経験との関連について表4-12、13で分析する。

表4-12、13のどちらも有意な結果が出ている³。

これより読み取れるのは次のようなことだ。すなわち、授業満足度が高いか低いにかかわらず、趣味や友人関係が充実していると高い意欲につながるというものである。これを踏まえると、作業仮説3-2の「授業満足度や行事適応度が低くても、趣味や友人関係の充実度が高いと、『うまくいくかわからないことにも意欲的に取り組む』と答える人が多

い」は実証されたとと言えるだろう。

本節では、意欲の高低について学校内/学校外の経験という基準を用いて分析してきた。結果としてわかったことを要約すると次の2点になる。第一に、高校グループから意欲への直接の影響は少ないということである。第二に、学校内の経験と学校外の経験は、どちらも意欲に対してプラスに働くということである。

3 紙幅の都合上載せなかったが、授業満足度を行事適応度で置き換えても、ともに危険率1%で有意な結果が出ている。

表4-10 「未知のことへの意欲」×「趣味充実」×「高校グループ」

Q34G × Q36A × 高校グループ

高校グループ			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
Aグループ	趣味充実	あてはまる (%)	54.9	45.1	100.0	419
		あてはまらない (%)	33.5	66.5	100.0	167
		合計 (%)	48.8	51.2	100.0	586
危険率0.1%で有意 p=0.000						
Bグループ	趣味充実	あてはまる (%)	51.2	48.8	100.0	209
		あてはまらない (%)	26.7	73.3	100.0	90
		合計 (%)	43.8	56.2	100.0	299
危険率0.1%で有意 p=0.000						
Cグループ	趣味充実	あてはまる (%)	48.5	51.5	100.0	396
		あてはまらない (%)	24.5	75.5	100.0	212
		合計 (%)	40.1	59.9	100.0	608
危険率0.1%で有意 p=0.000						

表4-11 「未知のことへの意欲」×「友人関係充実」×「高校グループ」

Q34G × Q36C × 高校グループ

高校グループ			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
Aグループ	友人関係充実	あてはまる (%)	53.2	46.8	100.0	470
		あてはまらない (%)	31.0	69.0	100.0	113
		合計 (%)	48.9	51.1	100.0	583
危険率0.1%で有意 p=0.000						
Bグループ	友人関係充実	あてはまる (%)	46.4	53.6	100.0	235
		あてはまらない (%)	34.9	65.1	100.0	63
		合計 (%)	44.0	56.0	100.0	298
有意差なし p=0.117						
Cグループ	友人関係充実	あてはまる (%)	43.8	56.2	100.0	468
		あてはまらない (%)	27.3	72.7	100.0	139
		合計 (%)	40.0	60.0	100.0	607
危険率1%で有意 p=0.001						

表 4-12 「未知のことへの意欲」×「趣味充実」×「授業満足」

Q34G×Q36A×Q11A

授業満足			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
そう思う	趣味充実	あてはまる (%)	58.0	42.0	100.0	519
		あてはまらない (%)	33.2	66.8	100.0	187
		合計 (%)	51.4	48.6	100.0	706
	危険率 0.1% で有意 p=0.000					
そう思わない	趣味充実	あてはまる (%)	45.0	55.0	100.0	504
		あてはまらない (%)	24.6	75.4	100.0	281
		合計 (%)	37.7	62.3	100.0	785
	危険率 0.1% で有意 p=0.000					

表 4-13 「未知のことへの意欲」×「友人関係充実」×「授業満足」

Q34G×Q36C×Q11A

授業満足			未知のことへの意欲		合計	N
			あてはまる	あてはまらない		
そう思う	友人関係充実	あてはまる (%)	54.5	45.5	100.0	605
		あてはまらない (%)	32.3	67.7	100.0	99
		合計 (%)	51.4	48.6	100.0	704
	危険率 0.1% で有意 p=0.000					
そう思わない	友人関係充実	あてはまる (%)	41.1	58.9	100.0	567
		あてはまらない (%)	28.8	71.2	100.0	215
		合計 (%)	37.7	62.3	100.0	782
	危険率 1% で有意 p=0.002					

5 結論と課題

本研究の意義は次の2点にまとめられる。第一に、高校生の持つ意欲について高校グループや社会階層といった制度や出自ではない面からアプローチしたことである。個人の力では容易に動かしがたい要因、あるいは政策的にもすぐには実行できないことにかかわる要因ではなく、個人の身近な生活にかかわる部分により注目することの有効性が示唆されている。私自身は、標準化された学力を能力の基準とする旧来のあり方よりも、個人の意欲が重視されるような現代のあり方を必ずしも是認する立場ではない。しかしながら、そのことが社会の一定の趨勢であるならば、個人ができる範囲で何か対処策があったほうがよい。現状では、新しいタイプの能力をどのようにして身につければよいのかがわからず、人々を不安に陥れているという面があるからだ。

第二に、学校内の経験だけではなく学校外の経験の重要性に注目するというものである。現行の学習指導要領が実施されてからは、「総合的な学習の時間」が意欲や関心を養成するための中核に据えられた。しかし、必ずしも正規のカリキュラムだけでしか意欲を養成できないわけではないと言えるだろう。学校の行事でもよいし、趣味や友人との交流はさらにそれ以上の効果がある可能性を本研究は示唆している。

最後に、本研究の限界や課題を確認しておく。まず、高校生の持つ意欲について、個人の生活に注目するという視座を提示したが、それは実に多様である。たとえば、本研究では高校生の経験について、部活動やアルバイ

トには触れられなかった⁴。また、友人関係といっても小学校時代からの友人と、近年増えているようなインターネット上の友人では違った影響を持っていたり、中には意欲に対してむしろ負の影響を持つものがあったりするかもしれない。それを学校内／学校外という区分で議論してしまうことには危うさが伴っている。

また、学校外の経験の重要性を指摘したところで、それを自発的に充実させていける子どもとそうでない子どもがいる。その差異には社会階層などの要因が働いている可能性がないとは言えず⁵、もしそうであるならば、どのような支援が可能かというような議論が必要になる。しかし、学校内の活動であるならまだしも、個人の趣味や友人関係について具体的な支援を行うとなれば、パターンリズムを超えて不当な介入と言わざるを得ないだろう。ゆえにあり得る方向性としては、子どもが自発的に学校外の経験を充実させていけるような社会的な基盤を整えていくなどということであるが、それはそれで非常に複雑な問題である。個人の意欲を重視する趨勢が当面続くとすれば、今後の研究においては、どのような個々の具体的な経験が子どもの意欲に対してプラスに働き、またそれを十分あり得るようにするためには、どのような制度設計が必要かということが求められるのではないか。

-
- 4 アルバイトについては、何らかの形で経験がある生徒がAグループでは20.0%と、分析を行う上で不十分と判断し、本研究では断念した。
 - 5 今回のデータにおいて大卒未満／大卒以上という区分では、父親・母親学歴ともに趣味・友人関係の充実度と有意な関連は見られなかった。

※脚注1より

表4-14 「高校グループ」×「父親学歴」

		高校グループ			合計	N
		Aグループ	Bグループ	Cグループ		
父親学歴	大卒未満 (%)	4.7	33.5	61.8	100.0	385
	大卒以上 (%)	30.2	42.4	27.5	100.0	255
	合計 (%)	14.8	37.0	48.1	100.0	640

危険率0.1%で有意 p=0.000

表4-15 「高校グループ」×「母親学歴」

		高校グループ			合計	N
		Aグループ	Bグループ	Cグループ		
母親学歴	大卒未満 (%)	9.9	36.8	53.2	100.0	524
	大卒以上 (%)	30.4	42.0	27.5	100.0	138
	合計 (%)	14.2	37.9	47.9	100.0	662

危険率0.1%で有意 p=0.000

<引用文献>

- 荒牧草平、2001、「学校生活と進路選択——高校生活の変化と大学・短大進学」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、63-80。
- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.
 (=1998、東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局。)
- 本田由紀、2005、『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版。
- 荻谷剛彦、1995、『大衆教育社会のゆくえ——学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論新社。
- 、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』^{インセンティブ・デバイド}有信堂高文社。
- 文部科学省、2003、『高等学校学習指導要領』。
- 轟亮、2001、「職業観と学校生活感——若者の『まじめ』は崩壊したか」尾嶋史章編著『現代高校生の計量社会学——進路・生活・世代』ミネルヴァ書房、129-58。